

アームナーヤ・マンジャリーの新資料

田中 公明

(1) はじめに

2017年の4月、非常勤の学芸員を務める富山県南砺市利賀村「瞑想の郷」のコレクションを同市の福光美術館に貸し出して開催される「デルゲ印経院チベット木版仏画展」の準備のため、中国四川省の成都市を訪れていた筆者は、チベット人研究者から、たまたま最近刊行された『蔵区民間所蔵 蔵文珍稀文献叢書』*Bod yul dmañs khrod kyi dca* (rtsaの誤?) *chen dpe rñiñ phyogs bsgrigs* (四川民族出版社・光明日報出版社, 2015年)なる豪華本を見せられた。これはチベット族地域の個人コレクションの中から貴重な古写本を選んで復刻した書物で、インド仏教最後の巨匠アバヤーカラグプタが著した『サンプタ・タントラ』の註釈『アームナーヤ・マンジャリー』*Āmnāyamañjarī*, チベット仏教カギュー派の祖師の道歌集, そしてプーカンパ・ジャムヤンリンチェンギェンツェン *sPos khañ pa 'jam dbyañs rin chen rgyal mtshan* の『三律儀経義善説』*sDom gsum gyi g'zūñ lugs legs par bśad pa* の3篇が収録されていた。

ところが『アームナーヤ・マンジャリー』の写本を一目見た筆者は、我が眼を疑った。ウメー文字で書かれたチベット訳の上に、対応するサンスクリット原文がワルトゥ文字⁽¹⁾で記されているではないか？

似たような事例としては、現在世界に流布している『アヴァダーナ・カルバラター』のサンスクリット・テキストが、ショルのパルカンで出版されたサンスクリット・チベット対訳テキストから抽出されたことが挙げられる⁽²⁾。しか

し『アヴァダーナ・カルパラター』は説話文学であり、『アームナーヤ・マンジャリー』のような後期密教の綱要書の梵蔵対訳テキストが作られ、しかもそれが文化大革命中の破壊を免れて現代に伝えられていたとは、全く予期していなかった。

本稿では、新たに刊行された『アームナーヤ・マンジャリー』の梵蔵対照テキストを紹介するとともに、その文献的価値について論じてみたい。

(2) 先行研究

それではまず、本稿の主題となる『サンプタ・タントラ』と『アームナーヤ・マンジャリー』について概観することにした

なお『サンプタ・タントラ』に関しては、長年同タントラに取り組んできた野口圭也による概説がある⁽³⁾。本節では、主として野口2006によりながら、その内容を概観するとともに、必要に応じて筆者の補足意見を述べることにしたい。

『サンプタ』は、チベットにおいて『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』両系共通の釈タントラとされている。しかし、その曼荼羅の中で最も大規模な金剛薩埵曼荼羅には、代表的な父タントラである『秘密集会』系の尊格群が登場する。またⅢ-i所説のヘールカ曼荼羅には最初期の母タントラ『サマーヨーガ』の影響が見られるなど、『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』両系にとどまらず、広く後期密教全般を総合しようとの編集意図が伺える。

同タントラは11章からなるが、第11章はウツラタントラとされ、『チベット大蔵経』では『サンプタ・ティラカ』⁽⁴⁾と呼ばれる別のテキストとなっている。これに対して根本タントラに当たる第1章から第10章までは、それぞれ4節からなっている。本稿では、『サンプタ』の章節を指摘する場合、野口氏にしたがって、第1章第1節をI-iというように表記している。

なおネパールからは、同タントラのサンスクリット写本が複数発見され、野口圭也やT・スコルプスキーらによって、いくつかの章節の校訂テキストが発表されている⁽⁵⁾。また George Robert Elder が、1978年にコロンビア大学に提出した博士論文には、同タントラの I -1 から iv までのテキストと英訳が含まれるが、同論文はいまだ公刊されていない⁽⁶⁾。

いっぽう同タントラの註釈は、『チベット大蔵経』に3篇が収録されているが、現在のところ、これらのサンスクリット原典は知られていない。しかしゲッチンゲン大学がパトナの K・P・ジャヤスヴァル・インスティテュートから入手したサンスクリット写本の中に、わずか一葉ながら断片が同定され、苫米地等流・加納和雄によるローマ字化テキストと研究が発表されている⁽⁷⁾。

いっぽうネパールからは、『サンプタタントラ註』*Samputatantra-ṭīkā* と呼ばれる貝葉写本が発見されている⁽⁸⁾。筆者が調査したところ、同文献は『チベット大蔵経』に収録される3篇の註釈の何れとも一致しない。『チベット大蔵経』所収の3篇のような逐語的な大部の註釈ではなく、達意釈というべきものであるが、冒頭から X - ii までの註が残存しており貴重である。

いっぽう『アームナーヤ・マンジャリー』は、11世紀後半から12世紀前半に活躍したインド密教最後の巨匠アバヤーカラグプタの大著で、ラーマパーラ王の37年に完成したとされる⁽⁹⁾。ツォンカパが『ガクリム』（密宗道次第広論）において頻りに同書を参照するなど、後世に与えた影響も大きかった。なお田中2009、森1991では、同書のサンスクリット題名を「アームナーヤ・マンジャリ」と表記していた。「マンジャリ」（花房）には *mañjari* と *mañjarī* の両方の語形が可能であるが、今回複製された写本では、つねに *mañjarī* と表記されていた。またアバヤーカラグプタ自身が『ヴァジュラーヴァリー』で本書に言及する場合も、*Āmnāyamañjarī* が用いられているので、本稿では『アームナーヤ・マンジャリー』と表記することにする。

その構成は40篇のマンジャリーからなり、一々のマンジャリーが『サンプタ』

の I - i から X - iv までの 40 の章節に対応している。

なお野口は、アバヤーカラグプタが『サンブタ』を重視したことから、彼自身が同タントラの編集に関わったとの意見を提出している⁽¹⁰⁾。ただし『アームナーヤ・マンジャリー』を読むと、アバヤーカラは、『サンブタ』の教説を祖述するに止まらず、自説や師説に基づく補説を広範囲に行っていることに気づく。アバヤーカラが、この著作を『秘訣（アームナーヤ）の花房（マンジャリー）』と名付けたのも、このような本文の性格によるものと思われる。

いっぽう筆者は、『アームナーヤ・マンジャリー』に説かれるサンヴァラ六十二尊曼荼羅の教理的解釈について論考を発表している⁽¹¹⁾。

(3) 写本の状態とテキストの信頼性

それでは『蔵区民間所蔵 蔵文珍稀文献叢書』に復刻された写本の概要について、簡単に見ることにしたい。

まず写本の所蔵者は明かされておらず、写本のサイズも記録されていない。縦横比が 1 : 7 の貝葉型写本であるが、貝葉とは異なり装丁用の穴がなく、写真からは紙本のペチャ写本と思われる。また第 1 葉裏面 (4 = 1b) 左右に、ヴァジュラヨーギニーとアバヤーカラグプタのイラストが付せられている。各葉の表面にはウメー文字でフォリオ番号が記され、最終葉 (891 = 444a) には *bzi brgya ze bzi byon* と記され、裏面 (892 = 444b) は白紙となっているから、444 葉であることが分かる。1 葉は原則として 6 行からなり、このうち 1・3・5 行目はサンスクリット、2・4・6 行目がチベット語である。なおサンスクリット原文とチベット訳を並行して書写すると、チベット訳の方が長くなるため、サンスクリット原文を対応するチベット訳の上に記して、その前後には空白を残してある。

またチベット訳は、ところどころ赤字で書写されている。まだ『サンブタ・

タントラ』の本文と対照していないが、おそらく『サンプタ』からの引用であることを明示するものと思われる。

なお 444a には、*āmnāyamañjaryāṃ śrīsaṃpuṭaṭīkāyāṃ saptadaśī mañjarī//* とある。したがって本写本は、I - i から X - iv までの 40 のマンジャリーのうち、I - i から V - i までの 17 マンジャリーの写本であることが分かる。しかし最終葉に *bzi brgya že bzi byon* と記されていることから、この対訳テキストは、制作時から V - ii 以下を欠いていたと考えられる。

本写本を一見した時、気になったのはテキストの信頼性である。本写本は近世にチベットで書写された紙本であり、インドあるいは中世ネパールで書写された貝葉写本とは異なり、サンスクリットに十分な知識を有しない人物が書写した可能性があった。つまり字形が似た文字の取り違いや文法的に誤った語形など、テキストとしての信頼性に疑問があった。

そこで筆者は、現在知られている唯一のサンスクリット断片であるゲッチング写本との比較を試みた。幸いなことに、ゲッチング写本は I - ii の断片なので、本写本の 188 (93b) から 199 (99a) までに対応箇所がある。両者を比較すると、いくつかの異読や似た字形の取り違いが認められたが、ほぼ対応しており、サンスクリット写本として十分な信頼性があることが判明した。

(4) 写本とチベット訳の対応関係

本写本は、『アームナーヤ・マンジャリー』の前半のみの写本ながら 444 葉もの文献量があり、限られた紙数でその全容を紹介することはできない。そこで以下に、本写本（第 17 マンジャリーまで）と『サンプタ・タントラ』、北京版⁽¹²⁾・デルゲ版所収のチベット訳との対照表と、各マンジャリー冒頭部分のローマ字転写を掲載することにした。なお [] や () で括った部分は、チベット訳に基づいて、サンスクリットの読みを修正した箇所である。また本写本に

用いられるチベット語の縮写文字⁽¹³⁾は、北京・デルゲ両版と対校し正則綴字に改めた。

第1 マンジャリー

g'zan yañ rmi lam du mthoñ ba'i/ rdo rje btsun mos bskul ba'i phyir/ rin chen lta bu'i yañ dag sbyor/ sems can don du dbye bar bya//	api ca svapnadr̥ṣṭānām preraṇād vajrayoṣitām/ udghāṭayāmi satvārtham ratnānām iva saṃpuṭam//
---	---

第2 マンジャリー

de ltar yañ dag pa'i byañ chub kyi sems kho na bsgom byar mdor bstan to// de kho na yañ 'bras bu dañ rgyu dañ thabs kyi rab tu dbye bas rgyud gsum gyi bdag ñid can no//	evaṃ bodhicittam eva bhāvyaṃ uddiṣṭam tad eva ca phalahetūpāya- prabhedena tantra[tra]yātmakam
--	--

第3 マンジャリー

bla na med pa'i byañ chub kyi sems bstan pas bya ba byas pa'i de b'zin g'segs pa rnam kyis byañ chub sems dpa' rnam kyi don gyi ched du gsol ba 'debs par mdzad pa ni de nas 'zes pa la sogs pa ste/	niruttarabodhicittadeśanayā kṛtakṛtyās tathāgatā bodhisattvānām arthāyābhyarthayanti/ athetyādi
---	--

第4 マンジャリー

byañ chub kyi sems	bodhicittam
--------------------	-------------

rab tu rgyas par bstan nas	pratīnirdīśyedam
bde ba chen po'i rañ bžin	eva mahāsukhamayam
de ma thag par gsal bar byas pa	antarasucitaṃ
'di kho na thabs dañ bcas par	sopāyaṃ
rgyas par ston par gsuñs pa/	pratīnirdiṣṭam āha/

第5 マンジャリー

rdzogs pa'i rim pa dañ bskyed pa'i rim pa	ayam utpannakramam
'di dbañ bskur med par	utpatti[kra]maś ca
ma yin žiñ de yañ	nāntareṇābhīsekam
dkyil 'khor med par ma yin pas	so 'pi na maṇḍalam antareṇeti
ji lta ba'i cho ga bžin de dag gsuñs pa/	yathāvidhi tāv āha/

第6 マンジャリー

byañ chub kyi sems de sgom pa med par	tad bodhicittan na vinā
gsal bar 'gyur ba ma yin no//	bhāvanayā sphuṭībhavatīty

第7 マンジャリー

rdzogs pa'i rim pa rgyas par bstan nas	utpannakramaṃ nirdīśya
de'i dños kyi thabs bskyed pa'i rim pa	tasya sākṣādupāyam
rgyas par ston pa'i ched du gsuñs pa/	utpattikramaṃ nirdeṣṭum āha/

第8 マンジャリー

de ltar bcom ldan 'das kyi	evaṃ bhagavataḥ
sgrub thabs kyi cho ga ñe bar bstan nas	sādhanaividhim upadiśya
'khor lo la sogs pas	cakrādinā

zi ba la sogs pa'i don du
 lha sna tshogs bsgom pa la
 'jug par byed de/
 ñon cig ces pa la sogs pa'o//

śāntikādyartham
 nānādevatābhāvanāyāṃ
 tārayati/
 śṛṅv ityādi/

第9 マンジャリー

he ru ka mñon par 'byuñ ba'i
 skabs byed de/
 ñon 'zes pa la sogs pa'o//

herukābhyudayaṃ
 prastauti
 śṛṅv ityādi/

第10 マンジャリー

ye śes mkha' 'gro ma bsgom pa la
 sbyor ba'i ched du gsuñs pa/

jñānaḍākinībhāvanāyāṃ
 niyojayitum āha/

第11 マンジャリー

bdag med ma la sogs pa
 rnal 'byor ma'i 'khor lo'i
 dbañ du byas nas bar ma'i rim pas
 rgyas par ston pa'i don du gsuñs pa/

nairātmyetyādi-
 yoginīcakram
 adhikṛtya madhyak[r]ameṇa
 nirdeśārtham āha/

第12 マンジャリー

bcom ldan 'das rdo rje sems dpa'
 'grub pa dañ/
 dños grub g'zan rnam kyañ
 dkyil 'khor sñon ma can no 'zes/
 bsgom bya'i dkyil 'khor dañ 'dra ba'i

bhagavato vajrasattvasya
 niṣpattir
 anyāsañ (= sāñ) ca siddhīnāṃ
 maṅḍalapūrviketi
 bhāvya maṅḍalasadṛśam

bri bya'i dkyil 'khor bśad pa'i ched du lekhyamaṅḍalam vaktum
gsuñs pa/ āha/

第 13 マンジャリー

de ltar rdzogs pa'i rim pa bsgom pa po evam asyotpannakramabhāvakasyo
'am bskyed pa'i rim pa sgom pa po tpattikramabhāvakasya vā
'di'i rnal 'byor pa gnas pa la yogino viharato vajrayoginyā
rdo rje rnal 'byor ma rnams 'du ba'i don du vaśyam ātmānaṃ saṃketeṇā
bdag ñid brdas ñes par ston te/ padarśayanti milanārthaṃ/

第 14 マンジャリー

bde mchog gi dkyil 'khor la gnas pa'i samvaramaṅḍalasthānām
rnal 'byor ma ñi śu rtsa bži rnams caturviṃśatiyoginīnām
bsdus pa ñid kyis bdun po rnams kyi miñ dañ saṃhṛtatvena saptānām
mtshan ñid bstan pa'i ched du gsuñs pa/ nāmalakṣaṇaṃ ca darśayitum āha/

第 15 マンジャリー

lā ma'i rigs can gyi bud med rnams kyi lāmājātīyānām {/} strīṇām
mtshan ñid la 'jug pa/ lakṣaṇam avatārayati/
de nas źes pa la sogs pa'o/ athetyādi/

第 16 マンジャリー

phyag rgya gźan brjod pa'i ched du mudrāntaraṃ vaktum/
gsuñs pa/ āha/
de nas śes pa la sogs pa'o/ athetyādi/

第17 マンジャリー

de ltar brda śes pa	evaṃ jñātasamketena
gañ du 'du bar bya ba	yatra militavyaṃ
de brjod pa'i ched du gsuñs pa/	tad vaktum āha/
de nas źes pa la sogs pa'o/	athetyādi/

(5) まとめと今後の課題

本稿で考察したように、最近中国で刊行された『藏区民間所蔵 藏文珍稀文献叢書』所収の『アームナーヤマンジャリー』の梵蔵対照テキストは、近世に書写された紙本写本ながら、ゲッチングン大学所蔵の断片との比較から、真正のサンスクリット写本を転写したものであり、写本とほぼ同等の価値をもつことが判明した。しかも冒頭から第17章（V - i）まで、ほぼ全篇の半分の原文が回収できることは貴重である。

筆者としては、すでにチベット訳に基づいて論文を発表したサンヴァラ六十二尊曼荼羅の教理的解釈の原文を知りたいが、残念ながらこの部分は本テキストには含まれていない。今後は、前半部分に含まれるトピックの中から、筆者が以前から関心を示しているヘールカ曼荼羅を説くⅢ - i や後期密教系の五相成身観を説くⅢ - ivなどの章節から、順次ローマ字化テキストを発表してゆきたいと考えている。

平成29年度学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）「インド・チベット密教と曼荼羅の研究」（課題番号15K02050）の成果の一部。

- 1 ワルトゥWartuはランチャと並んで、チベットで用いられる梵字の書体である。ランチャがインドのランジャナ体由来し、真言や種字の書写に用いられる装飾性

の高い字体であるのに対し、ワルトゥは儀軌など、より実用的な文献の書写に用いられる。語源は「丸まった」を意味する *vartula* が転訛したものと思われる。1981年に、アムド出身の高名な歴史家ツェテンシャブドゥンが筆写した字母表 *Wartu'i ma phyi* (瓦徳字帖)、西寧：青海民族出版社が刊行された。

- 2 この問題については、P. L. Vaidya: *Avadāna-kalpalaṭā of Kṣemendra*, Vol.1, Buddhist Sanskrit Texts No.22, Darbhanga 1959のIntroduction, 1.The Editionsを参照。
- 3 野口圭也「サンプタ・タントラ」松長有慶編著『インド後期密教(下)』(春秋社, 2006) 145-172.
- 4 北京No.27, rGyud kyi rgyal po chen po dpal yañ dag par sbyor ba'i thig le zés bya ba.
- 5 詳しくは野口 2006, 153-154を参照。
- 6 2017年5月現在、同論文は以下のHPからダウンロードすることができる。http://abhidharma.ru/A/Tantra/Content/Hevajra/0004.pdf
- 7 Toru Tomabechi and Kazuo Kano: A Critical Edition and Translation of a Text Fragment from Abhayākaragupta's Āmnāyamañjarī: Göttingen, Cod.ms. sanscr. 259b, *Tantric Studies* Vol. 1, Hamburg 2008.
- 8 Kesar Library No.228 (Nepal German Manuscript Preservation Project Reel No.C 26/1)
- 9 森雅秀「Abhayākaraguptaの曼荼羅儀軌 *Vajrāvalī*」『印度学仏教学研究』39-2 (1991) 858.
- 10 野口 2006, 157-159.
- 11 拙稿「『アームナーヤ・マンジャリー』に見るサンヴァラ曼荼羅の解釈法」『インド哲学仏教学研究』第16号 (2009) 55-68.
- 12 北京版は、『影印北京版西藏大藏経』の頁とフォリオを記載している。
- 13 チベット語の縮写文字については、越智淳仁「チベット語の縮写文字」『密教文化』163 (1988) 96-89を参照。その後、網羅的な字典として謝扎『藏文縮略語詞典』北京：民族出版社 2003が刊行されたが、本写本で用いられる縮写文字は、ほぼ越智1988で取り上げられた範囲に留まっている。

	『サンブタ』	写本	影印北京版	デルゲ版
1	I - i	3-128	105-1-1 ~ 116-3-1	cha 1b1-22b7
2	I - ii	128-207	116-3-1 ~ 122-2-3	cha 22b7-36a1
3	I - iii	207-259	122-2-3 ~ 126-2-3	cha 36a1-44b5
4	I - iv	259-346	126-2-4 ~ 132-5-6	cha 44b5-59a6
5	II - i	346-431	132-5-6 ~ 139-2-8	cha 59a6-73a7
6	II - ii	431-485	139-2-8 ~ 143-2-7	cha 73a7-82b3
7	II - iii	485-533	143-2-7 ~ 147-1-2	cha 82b3-91a4
8	II - iv	533-549	147-1-2 ~ 148-1-8	cha 91a4-93b6
9	III - i	549-576	148-1-8 ~ 150-2-2	cha 93b6-98b2
10	III - ii	576-595	150-2-2 ~ 151-4-3	cha 98b2-102a1
11	III - iii	596-619	151-4-3 ~ 153-3-3	cha 102a1-106a4
12	III - iv	619-829	153-3-3 ~ 170-4-2	cha 106a4-145b2
13	IV - i	829-843	170-4-2 ~ 171-4-8	cha 145b2-148a3
14	IV - ii	843-849	171-4-8 ~ 172-2-4	cha 148a3-149a5
15	IV - iii	849-855	172-2-4 ~ 172-4-5	cha 149a5-150a4
16	IV - iv	855-856	172-4-5 ~ 172-5-2	cha 150a4-150b2
17	V - i	856-891	172-5-2 ~ 175-4-2	cha 150b2-156b6

New Material on the *Āmnāyamañjarī*

by Kimiaki TANAKA

In April 2017 I visited Chengdu in Sichuan Province, China, as part of preparations for an exhibition of woodblock Buddhist paintings from Derge Parkhang that are to be loaned to Nanto Fukumitsu Art Museum from the collection of the Meditation Museum in Toga Village, Nanto City, Toyama Prefecture, where I serve as an outside curator. During my visit to Chengdu, a Tibetan scholar showed me a recently published sumptuous volume entitled *Zangqu minjian suocang Zangwen zhenxi wenxian congshu* 藏区民間所藏 藏文珍稀文献叢書 (Chengdu: Sichuan Minzu Chubanshe 四川民族出版社 and Guangming Ribao Chubanshe 光明日報出版社, 2015), which contains reproductions of valuable old manuscripts held in private collections in Tibetan ethnic regions. These include the *Āmnāyamañjarī*, a commentary on the *Samputa-tantra* by Abhayākara-gupta, the last great scholar of Indian Buddhism; a collection of poems by the founder of the Tibetan Kagyü school; and the *sDom gsum gyi g'zun lugs legs par bsad pa* by sPos khañ pa 'jam dbyaṅ rin chen rgyal mtshan.

But when I looked at the manuscript of the *Āmnāyamañjarī*, I could not believe my eyes, for above the Tibetan translation written in *dbu med* script the corresponding original Sanskrit text had been written in the Warty script. To date, no Sanskrit manuscript of the *Āmnāyamañjarī* has been discovered, and only a single folio has been identified among Sanskrit manuscripts obtained by the University of Göttingen in Germany from the K. P. Jayaswal Research Institute in Patna, India.

A similar example to that of the *Āmnāyamañjarī* is the currently circulating Sanskrit text of the *Avadānakalpalatā*, which was recovered from a Sanskrit-Tibetan text published by the printing house in Ḍol. But whereas the

Avadānakalḥalatā is a work of narrative literature, I would never have expected the bilingual Sanskrit-Tibetan text of a compendium of late tantric Buddhism such as the *Āmnāyamañjarī* to have been produced and to have, moreover, escaped destruction during the Cultural Revolution and survived down to the present day.

In this article, I provide an overview of this recently published Sanskrit-Tibetan text of the *Āmnāyamañjarī* and discuss its textual value.